



マレーカンポンにおける組織・施設・活動とマレーシアホームステイプログラムの関係に関する事例研究：セランゴール州におけるスンガイシレホームステイの経営に着目して

ビンティ ラメリ, ロハスリンダ
山崎, 寿一

(Citation)

農村計画学会誌, 33:269-274

(Issue Date)

2014

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90003053>



マレーカンポンにおける組織・施設・活動と マレーシアホームステイプログラムの関係に関する事例研究

セランゴール州におけるスンガイシレホームステイの経営に着目して
The Relationship of Malay Kampung Organization, Facility, and Activity with the Malaysian Homestay Program
Focusing on the Management of Sungai Sirih Homestay at Selangor

ロハスリンダビンティラメリ* 山崎寿一**

Rohaslinda BINTI RAMELE* Juichi YAMAZAKI**

(*神戸大学大学院博士課程後期課程 **神戸大学大学院工学研究科教授・博士(工学))

(*PhD Candidate, Graduate School of Engineering, Kobe University **Prof., Graduate School of Engineering, Kobe University, Dr. Eng.)

I はじめに

1 研究背景

マレーシアの農村では、1995年にマレーシアホームステイプログラム(Malaysian Homestay Program:以後、MHPと表現する)が策定された。MHPは、現在ではマレーカンポン(Malay Kampung:マレー村)の新たな農村観光開発や伝統文化保存において大きな成果をあげていると行政においては高く評価されているが^{*注1)}、その実態を評価した学術論文や調査レポートは少ない。その中で、イブラヒム(マレーシアトレンガヌ大学社会人文学部、教授)が行った社会開発から見るMHPの研究¹⁾、ハムザー(マレーシア工科大学建設環境学部、教授)が行った観光産業の展開から見るMHPの研究²⁾、ジャマル(マラ工科大学観光学部、講師)が行った観光客の知見から見るMHPの研究³⁾が既往研究としてあげられるが、概要紹介にとどまり、実証性が貧しい。

本稿は、大きくはマレーシアの農村地域開発政策及び農村計画に関する研究と位置づけられ、その中でもMHPを対象とした研究の第2報である⁴⁾。

研究対象としているセランゴール州はマレーシアで最も都市化が進んでいる州であり、本研究で取り上げるMHPが積極的に導入されたモデルが数多く位置している。その中で、筆者らは、収入と観光客数においてセランゴール州のMHPの上位のベスト3にランキングされているドラニホームステイ;スンガイシレホームステイ;バングリリスホームステイに関するフィールド調査を進めた(表1)。

前報では、農村地域開発政策の発展を整理し、その政策に導入されたMHPのコンセプト・政策導入の経緯、コミュニティのMHPへの参加に関する実態と特徴を明

らかにした。また、2010年にマレーシア住宅地方自治体省が初めて公表した「農村マスタープラン」を基礎資料に、これまで全対象が把握されていなかったマレーシアの農村集落・マレーカンポンの概要を把握し、紹介した。

マレーシアの農村はマレー系の稲作村・果樹栽培村が農村類型の9割以上を占め、農村振興策が重点的に導入されている。前報では先にあげた三つの事例のうち、単独稲作村がホームステイ委員会を設立してMHPの経営を行っているドラニホームステイを事例とし、MHPの概要・特徴を報告した。本稿では、第二の経営タイプとして、複数稲作村が協同組合を設立してMHPを運営するスンガイシレホームステイを対象に、コミュニティ(組織、施設、活動)とMHPの関係を整理し、MHPの経営面での特徴を明らかにする。尚、スンガイシレホームステイはMHPのランキングで国の7位・セランゴール州の2位になっており、観光省によって成功事例として認定されている。

また、第三の経営タイプの代表事例として果樹栽培村であるバングリリスホームステイの調査も行っているが、紙面の場合上、その報告は別の機会としたい。また、セランゴール州における三つのホームステイプログラムの比較考察は今後発表する予定である。

表1 ドラニ;スンガイシレ;バングリリスのホームステイプログラムの背景

Table 1 Dorani, Sungai Sirih and Banghuris Homestay Background

	ドラニ	スンガイシレ	バングリリス
地方	サバック ペルナム	クアラ セランゴール	セパン
村の種類	稲作村	稲作村	果樹栽培村
村の数	1	5	3
策定年	1996年	1995年	1995年
経営形態	ホームステイ 委員会	ホームステイ委 員会と協同組合	ホームステイ 委員会

(2012年7月~2014年4月の調査より著者作成, 2014年)

2 研究目的

本稿では、マレーカンボンの全国的な概要を整理した上で、対象村におけるマレーカンボンの組織（特に村開発安全委員会）、政府によって整備された公共施設、コミュニティ活動の実態とそれに関連する MHP とその特徴を、村開発安全委員会・公共施設・コミュニティ活動との関連から明らかにする。合わせて MHP の経営面での特徴、評価を考察する。

3 研究方法

本研究では、以下の手順で考察を進めた。

①観光省によって策定された「MHP 登録ガイドライン」,「2014 年 3 月までの MHP の統計」,地方自治体省の「農村マスタープラン」の報告書・関連資料・伝統的なマレーカンボンに関する既往研究によって得られた民家集落,コミュニティに関する情報を用いて MHP とマレーカンボンの特徴を把握した。

②更に、観光省の担当部局における資料収集によって収入と観光客数を基準としたランキングによる成功事例を把握し、その所在地,農村類型（主要作物）,経営形態からモデル的な MHP を整理した。更に MHP 担当者へのヒアリング結果を踏まえて、設定された成功事例の中から研究対象に選定した。

③ここではセランゴール州の稲作村におけるスンガイシレホームステイを対象とし,2013 年 2 月から 2014 年 4 月にかけて,ホームステイ委員会の会長・参加する村の村長へのヒアリングを行い,マレーカンボンの概要（組織・施設・活動）と MHP の実態を整理した。

④特にスンガイシレホームステイを対象に,ホームステイ委員会の会長,協同組合の社長,ホストファミリーへのヒアリングを実施し,経営面からみた MHP の実態把握と評価・考察を以下の諸点で進めた。

- 1) 参加する諸村の協力
- 2) ホームステイ委員会と協同組合の構成
- 3) 行政と村開発安全委員会との連携
- 4) ホームステイ委員会の作戦
- 5) ホストファミリーの収入

II マレーカンボンと MHP の概要

1 マレーカンボンの概要

2010 年に策定された「農村マスタープラン」⁵⁾では、マレーシアの農村は「10,000 以下の人口を持ち、都市の中心部から 12km から 36km に位置すること」と定義されている。マレー半島の農村におけるカンボンの数は 14,003 であり、93%が自然集落で 7%が計画集落である。

自然集落は伝統農村・漁村・水上村・先住民村に区分され、90%が稲作村と果樹栽培村を占める伝統農村である。

MHP はマレー系住民の居住する伝統農村を中心に導入され、コミュニティの組織・活動と密接な関係をもって実施されている（後述）。2010 年の農村マスタープランによると、本稿で研究対象としたスンガイシレホームステイに参加している村は自然集落・伝統農村・稲作村に分類されている。

マレー半島を中心に、マレーシアの農村にはマレー系民族が主に住んでおり、集落はマレーカンボンと呼ばれている。伝統的なマレーカンボンの空間構成を、フイー（マレーシア遺産トラスト副会長、建築家）が行った伝統的なマレーカンボンとマレー民家に関する研究⁶⁾から紹介すると、マレーカンボンにはモスク・墓地・伝統的な民家・学校・サッカー場・ワロン（小さな飲食店）等の施設によって構成されているのが一般的である。2010 年の農村マスタープランによると、現在のマレーカンボンには、農村地域開発省が行う農村開発計画によってコミュニティホール・村開発安全委員会のホール・多目的ホール・インターネットセンター・図書館・健康所までが公共施設として整備されている。

マレーカンボンには行政の末端組織として、日本の自治会・町内会に相当する村開発安全委員会（Village Development and Security Committee : 以後、VDSC と表現する）が設置されている。第二次マラヤ計画^{注 2)}によると、この組織は、1960 年に農村地域開発省によって、マレー半島における各集落に政府と農村コミュニティの連絡役となり、農村コミュニティを政府が実施する農村計画に参加させるために設立されたものである⁷⁾。村長は委員会の会長になり、委員会には会長・秘書・会計が各一名決められ、その下に、若者委員会・女性委員会・モスク委員会が設置されている。これが一般的な構成である（図 1）。村開発安全委員会はマレーカンボンでのコミュニティ活動にも大きく関わり、活動の準備と実行から予算調達までを担う。州政府と地方自治体はこの委員会にアドバイスと財政補助に対する支援を行い、コミュニティベースの農村開発を進めている。

エンビー（マレーシアプトラ大学人類生態学部、教授）が行ったマレーカンボンでの生活に関する研究⁸⁾によると、マレーカンボンで行うコミュニティ活動は大部分が



図 1 村開発安全委員会の構成

Fig. 1 The Structure of VDSC

（出典：第二次マラヤ計画、1960 年）*注 2)

イスラム教の礼拝と行事であり、モスクで行うことが多い。コミュニティホールが建設される前に、モスクは唯一のコミュニティ施設であり、村開発安全委員会の会議場やスポーツのイベント場等としても使用されていた。

エンビーの研究によると、マレーカンボンにおけるコミュニティ活動の中心は、モスク委員会（～1960年）または村開発安全委員会（1960年～）が運営したイスラム教の礼拝と行事・結婚式・葬式等・宗教以外の行事であった。この活動ではよくケンドゥリ（kenduri：食事会）が持たれ、その準備と実行はゴトンロヨン（gotong-royong：相互扶助）と呼ばれる協同慣行によって行われる。ゴトンロヨンはマレーシアにおけるコミュニティ施設の掃除・修理の作業やケンドゥリの料理の準備等を行う時に見られる習慣である。ゴトンロヨンには、村全体（最低各家族に一人）が出席するのが基本である。

このような村開発安全委員会の組織・州の政府と地方自治体の支援、コミュニティ活動への参加、支援の体制が整備され、1995年にマレーシア全体の農村集落を対象にMHPが導入されることになった。そしてMHPは、マレーカンボンの伝統的な生活・文化と習慣・果樹栽培と稲作の景観をプログラム内容として活用した新たな観光プロダクトに成長し、現在に至っている。

2 MHPの概要

前述したようにMHPは国の観光産業・農村集落・農村コミュニティの発展を目的とし、1995年に観光省によって策定された。このプログラムに参加する条件として「MHP登録ガイドライン」⁹⁾が観光省によって策定された。このガイドラインによると、参加する村と民家の登録の評価には、観光省の他に、健康省・村開発安全委員会・州のホームステイ委員会・農村地域開発省も関わり、MHPは国家レベルの総合政策となっている点に特徴がある。

参加している村では、観光省・農村地域開発省・農業省・教育省によってホームステイプログラム施設の整備・公共施設の整備・農業開発・ホームステイプログラムのプロモーションに対する補助と支援が与えられる。これらの補助と支援は参加する村に設立されるホームステイ委員会を通して提供される。ホームステイ委員会の委員には村民、村長が会長になる場合が多い。ホームステイ委員会の役割は既存の村開発安全委員会の役割と類似しており、ホームステイプログラムに関連する政府組織とホストファミリーとして参加する村民達の連絡役になっている。ホームステイ委員会が作成するプログラムは、村民達の日常生活・経済活動・コミュニティ活動と深い関係を持ち、伝統的文化や自然資源を活用したもの

となっている。

このような政府組織の支援を受けながら、農村コミュニティ（ホームステイ委員会の委員とホストファミリー）が運営主体となって経営に当たっている。MHPはコミュニティベースツーリズムと呼ばれることもある。

観光省の記録では、2014年3月時点のマレーシア全体におけるホームステイプログラムの数は170であり、302の村と3,486世帯のホストファミリーが参加し、4,834の観光客用の個室が提供されている¹⁰⁾。

III スンガイシレ村の概要

スンガイシレホームステイはセランゴール州の北部、クアラセランゴールのディストリクト（地区）に位置するスンガイシレ村に設立された（図2）。2014年3月26日に行ったスンガイシレ村の村長へのヒアリングによると、この村は1938年にペナンから来たイスラム教のリーダー（マレー系、その後にスンガイシレ村の村長）が入植し、ペナンからの移住者とともに設立された開拓村である。その後、稲作を主とした農業が営まれ、他の州からのマレー系とインドネシアからのジャワ人が移住し、人口が増加した。

2007年にクアラセランゴールディストリクトの役所によって策定された「ディストリクト・ローカル・プラン」¹¹⁾によると、現在のスンガイシレ村では、4,628人が住んでおり（100%がマレー系）、稲作の他に、パーム油農業を行っている。公共施設としてモスク、村開発安全委員会のホール、コミュニティホール、墓地、小学校が設置され、更に、農村地域開発省の「無線の村計画」によって村全体では無線のインターネットが整備されている。



図2 セランゴール州でのスンガイシレ村の位置
Fig. 2 The Location of Kampung Sungai Sirih in Selangor
(2010年の農村マスタープランより筆者作成、2014年)²⁾

スンガイシレ村の村開発安全委員会は、村長が会長になり、秘書・会計・UMNO（United Malay Nation Organization：統一マレー人国民組織）の代表者に補助され、モスク委員会・女性委員会・若者委員会に区分されている（図3）。村開発安全委員会はスンガイシレ村でのコミュニティ活動に大きく関わっており、その活動の大半はモスクで行っているイスラム教の行事である（表2）。

2014年4月1日に行ったホームステイ委員会の会長へのヒアリングによると、1990年代に、スンガイシレ村は農村地域開発省が行った「農村集落の美化コンテスト」で何回も優勝し、様々な団体が視察に訪れるモデル村となっている。それがきっかけとなって、1995年にMHPに参加することになった。

ホームステイプログラムの活動に使用するために観光省がスンガイシレアグロツーリズム活動センター（Sungai Sireh Agrotourism Activity Center、以後、SSAACと表現する）を建設し、村の一部のコミュニティ活動はこのセンターで行われるようになった。観光客と村民達の交流・観光客に提供するマレーカンボンの体験のためにスンガイシレホームステイに訪問する観光客もこのセンターで行っているコミュニティ活動に参加している。

IV スンガイシレホームステイの実施と経営面での特徴

2013年2月から2014年4月までに行った現地調査と2014年4月1日に行ったホームステイ委員会の会長へのヒアリングを行った結果を、以下に報告する。

1 参加する諸村の協力

スンガイシレ村は元々一つの村であったが、2013年に政府の指導で組織が分割りされ、二つの村（スンガイシレ村とアンパンガン村）になっている。更に、スンガイシレホームステイには、周辺に位置する他の三つの村の村民がホストファミリーとホームステイ委員会のスタッフとして参加していることから五つの村によってスンガイシレホームステイが実施されていることになる（図4）。

この五つの村が参加したことによって、ホストファミリーの数が1995年の15世帯から現在の41世帯に増加した（表3）。プログラムの実施もスンガイシレ村とアンパンガン村だけでなく、他の三つの村でも行い、それぞれの村開発安全委員会と村民の協力によって実施されている。このような二つ以上の村が参加しているホームステイプログラムはマレーシア全体でも少ない事例であり、スンガイシレホームステイの特徴と言える。

2 ホームステイ委員会と協同組合の経営

スンガイシレホームステイのホームステイ委員会には13人（男性12人と女性1人）のスンガイシレ村の村民を中心に設立されている（図5）。その中には会長（スンガイシレ村の村長）と副会長がおり、プロモーション・運営・宿泊・会計・レジャー・見学・文化・ハンドクラフト・料理・安全の担当者がいる。更に、2000年にホームステイ委員会の委員（宿泊の担当者）がスンガイシレホームステイ協同組合（Koperasi Homestay Sungai Sireh Tanjong Karang Berhad：スンガイシレ・タンジョンカララン協同組合）を設立し、そこでは、20人以上の村の若者達をスタッフとして雇っている。

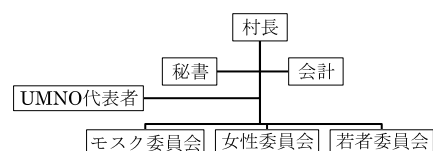


図3 スンガイシレ村の村開発安全委員会の構成

Fig. 3 The Structure of VDSC at Kampung Sungai Sireh (村長へのヒアリングより著者作成、2014年)

表2 スンガイシレ村のコミュニティ活動

Table 2 Community Activities at Kampung Sungai Sireh

活動	場所
礼拝	モスク
イスラム教の行事	モスク・SSAAC
モスクの修理	モスク
結婚式	モスク・SSAAC
葬式	モスク・個人の民家
村開発安全委員会の会議	村開発安全委員会ホール
若者委員会スポーツ大会	コミュニティホール
教師の日	SSAAC

(村長へのヒアリングより著者作成、2014年)

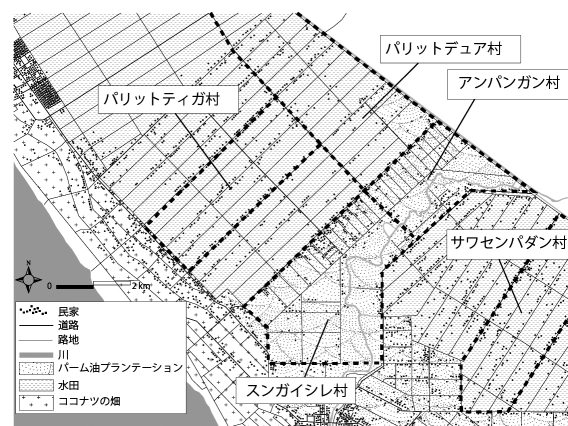


図4 スンガイシレホームステイに参加する村の位置

Fig. 4 Participating Villages in Sungai Sireh Homestay (2007年のDistrict Local Planより筆者作成、2014年)⁸⁾

表3 五つの村におけるホストファミリーの数

Table 3 Number of Host Families in 5 Participating Villages

村の名前	ホストファミリーの数（世帯）
スンガイシレ村	11
アンパンガン村	16
バリットデュア村	7
バリットティガ村	2
サワセンバダン村	5
合計	41

(ホームステイ委員会会長へのヒアリングより著者作成、2014年)

ここで、ホームステイ委員会が経営の指揮をとり、協同組合がプログラムの内容を決定し、若者のスタッフがプログラムの内容を実行する。このような運営システムが確立されている点が、セランゴール州での MHP の中で高く評価されている。若者のスタッフの月収は、RM700 (約¥21,000) であり、スンガイシレホームステイへの若者の参加が多いことも特徴のひとつである。

3 行政と村委員会との連携

MHP は国家レベルの観光省や農村地域開発省等の国の政府組織が中心となっているが、スンガイシレホームステイでは、地方自治体・地方政治団体・地方農業省・市役所までがホームステイ委員会のアドバイザーとして参加している。村開発安全委員会とも連携し、村長がホームステイ委員会の会長になり、件ホームステイ委員会とホストファミリーになっている。セランゴール州における他のホームステイプログラムと異なり、ここでは、国の政府組織が地方と村の組織と協力している点が、大きな特徴となっている。

4 ホームステイ委員会の作戦

ここでは、ホームステイ委員会と協同組合の経営とプロモーションにおける作戦にも特徴がある。若者のスタッフの衣装・性格・清潔に対するルールを徹底させ、観光客の満足度を重視した経営が行われている。観光客に絵はがきや伝統的なゲーム等を含むお土産を提供するサービスも行っている。その他、スンガイシレホームステイは国内旅行会社・シンガポール旅行会社・クアラセランゴール国立公園と契約をし、定期的に観光客を確保している。ホームステイ委員会も積極的にスンガイシレホームステイの宣伝をパンフレット・ブログ・観光省の展示会・海外の学校への見学を通して行っている。

5 プログラムの内容

MHP の観光客はホストファミリーと一緒に住み、その家族の日常生活とカンボンの活動に参加する。スンガイシレホームステイでも、ホームステイ委員会によって作成されたプログラムの内容があり、村の日常生活・経済活動・コミュニティ活動・マレーとジャワの伝統的な習慣と文化を活用している (表 4)。プログラムは参加する五つの村におけるホストファミリーの民家、SSATC、個人の水田と畑で行われている。稲作とパーム油農業が主になっているスンガイシレ村の経済活動には、アグロツーリズムを中心にプログラム内容が作成されている。また、村の奥に流れている川と森を活かし、エコツーリズムの活動をプログラムの内容に追加し、観光客にカヤッ

クの体験やキャンププログラム等も提供されている。

6 ホストファミリーの収入

表 5 で示すように、スンガイシレホームステイを訪問した観光客数とこのプログラムから得た収入には変動があるが、統計ではマレーシア全体の MHP の中で高い位置にランキングされている。2012 年に、スンガイシレホームステイは全国で 7 位、セランゴール州で 2 位にランキングされた。訪問する観光客の中には、大学生の団体・個人・家族・学校部活の団体・他の村の若者委員会が多く記録されている。

スンガイシレホームステイの収入は観光客数 (観光客から得た参加費) によって決まっており、参加費はホームステイ委員会が受け取り、参加する村民 (ホームステイ委員会の委員とスタッフ、ホストファミリー) に分配される。参加費はホームステイ委員会によって作成されている様々なパッケージ (プログラムの内容より選択で

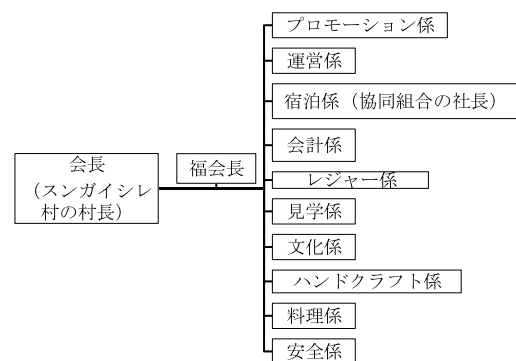


図 5 スンガイシレホームステイ委員会の構成

Fig. 5 The Structure of Sungai Sirih Homestay Committee
(ホームステイ委員会会長へのヒアリングより著者作成, 2014 年)

表 4 スンガイシレホームステイのプログラム内容

日常生活	ホストファミリーの民家で食事と宿泊
	自転車 で村を回る
	水田で釣りを体験する
経済活動	伝統的ゲームを遊ぶ
	水田と畑を見学する
	稲作と畑作業を体験する
	農産物加工業の工場を見学
	牧場を見学する
	パティック彩色を体験する
コミュニティ活動	ハンドクラフト作業を体験する
	イスラム教行事を出席する
	結婚式を出席する
	結婚式を体験する
文化活動	スポーツ大会を出席する
	伝統的踊りと楽器演奏を見る
エコツーリズム活動	キャンプをする
	川でカヤックを体験する
	ジャングルトレッキング

(出典: スンガイシレホームステイパンフレット, 2014 年)

表 5 スンガイシレホームステイの観光客数と収入

年	国内観光客数	外国人観光客数	MHP の収入
2009	8,459 人	368 人	RM1,139,082
2010	7,264 人	519 人	RM419,402
2011	8,431 人	545 人	RM267,947
2012	6,388 人	511 人	RM440,114

(出典: MHP 統計, 2014 年) ⁷⁾

きる)によって決まっている。その中には、例えば、日帰り(RM69:約¥2,070)、1泊2日(RM146:約¥4,380)、2泊3日(RM264:約¥7,920)、3泊4日(RM345:約¥10,350)のパッケージが提供されている。この参加費からホストファミリーが得る収入は観光客数と宿泊数によって決まっている。稲作とパーム油農家としてRM1,000(¥30,000)の平均月収には、このプログラムから更にRM600(¥18,000)の平均月収が加えている。

観光客数とMHPから得た収入の評価によって、スンガイシレホームステイは2007年、2012年、2013年に国家レベル・2012年にセランゴール州レベルの「MHP賞」を獲得している。

IV 結論

本稿では、マレーカンボンの概要を示し、マレーカンボンの組織、施設、活動の実態とそれと関連するMHPの実態を整理することができた。具体的にはMHPのホームステイ委員会の役割がマレーカンボンにおける村開発安全委員会の役割と類似していること(政府と村民の連絡役としての役割)、村開発安全委員会がMHPに参加すること、MHPで整備された施設(ホームステイ活動センター)が村のコミュニティ活動を行う公共施設にもなっていること、MHPの観光客は村のプログラムの内容における日常生活・経済活動・コミュニティ活動・文化活動に参加することを明らかにした。

また、セランゴール州におけるスンガイシレホームステイを見た場合、MHPの経営面での特徴を明らかにした。具体的には、ホストファミリーとして参加する五つの村の村民達の協力、ホームステイ委員会と協同組合、更に20人以上の若者スタッフの多人数によるユニークな経営、ホームステイ委員会と既存の地方自治体・ホームステイ委員会と農業省・市役所・政治団体・村開発安全委員会との連携、ホームステイ委員会の積極的な作戦とプ

ロモーション、エコツーリズムも体験できるプログラムの内容・農家の収入を加え、MHP賞まで獲得したのとその特徴になっていることを指摘できる。

注

注1)2013年2月8日に行ったマレーシア観光省におけるMHPの担当者へのヒアリングによって得られた情報。

注2)マラヤ計画(1957年~1965年)またはマレーシア計画(1966年以降)は、マレーシアが独立後、五年ごとに策定される開発5ヵ年計画である。(引用文献7)

引用文献

- 1)ヤハヤ・イブラヒム(2010):マレーシアの農村観光と島観光:観光への住民の参加と観光のもたらす影響について、立命館大学人文科学研究所紀要、95号。
- 2)Hamzah, A (1997): The Evolution of Small-scale Tourism in Malaysia: Problems, Opportunities and Implications for Sustainability, Tourism and Sustainability: Principle to Practice, 199-217.
- 3)Jamal, SA, Othman, NA, Muhammad, NMN (2011): Tourist Perceived Value in a Community-based Homestay Visit: An Investigation into the Functional and Experiential Aspect of Value, Journal of Vacation Marketing 17 (1), 5-15.
- 4)ロハスリンダビンティラメリ・山崎寿一(2013):マレー半島の伝統農村におけるマレーシアホームステイプログラムの特徴に関する考察:セランゴール州における稲作村でのドラニホームステイを事例として、農村計画学会誌32(論文特集号), 161-166.
- 5)Ministry of Urban Wellbeing, Housing and Local Government (2010): Master Plan for Traditional and Planned Settlements in Peninsular Malaysia.
- 6)Fee, CV (2007): Encyclopedia of Malaysia VO5: Architecture, Archipelago Press, 18-19.
- 7)Prime Minister's Department (1961): 2nd Malaya Plan 1961-1965.
- 8)Emby, Z (1996): Kampung Buruit: Mengimbangkan Penghidupan dan Hidup Bermasyarakat (ブルイット村:コミュニティ生活とのバランス), Jati, 2, 91-98.
- 9)Ministry of Tourism (1995): Malaysia Homestay Program Registration Guidelines.
- 10)Ministry of Tourism (2014): Malaysia Homestay Program Statistics March 2014.
- 11)Kuala Selangor District Council (2007): District Local Plan.

Summary : This study clarifies that the Malaysian Homestay Program (MHP) is related to the existing social organization and community activities at Malay Kampung through these points: 1. The role of the Homestay Committee is similar to the role of the existing Village Development and Security Committee, 2. Villagers use MHP facility as a community facility, 3. MHP tourists take part in the village's daily, economic, community and cultural activities. At Sungai Sireh Homestay, Selangor, cooperation among five villages; organized by a cooperative body; participation of district local authorities; and additional activities of eco-tourism, create the characteristics in its management.

キーワード (Keywords) : マレーカンボン (Malay Kampung), マレーシアホームステイプログラム (Malaysia Homestay Program), スンガイシレホームステイ (Sungai Sireh Homestay), 経営 (management)

(2014年5月18日 原稿受理)

(2014年9月15日 採用決定)